

直なり、壁のゑつりは山茅を用ゆ、大ひなる茅ある故に、多くは竹のかはりにこれを用ゆ、他より思ふとは格別にして、又相應にかへ用ゆるもの生ずるも天地の妙なり、それより北方越後、出羽奥州も南部領邊は、人民一生竹を見ざるもの有、太き竹は絶てなし、夫故人家の邊に、南國のごとく竹藪といふものなし、山中に笹あり、是も熊笹にて竹の用に立べきものに非ず、南國にては竹ほど人家の重寶に成るものはなく、一日なくて叶はぬやうに覺ゆれども、斯の如く竹なくてもさのみ不自由なる様にも見えず、只桶の輪のみ何方にても難儀に見ゆ、津輕秋田邊にては、椶木の皮の様に見ゆるものを曲て、樺にてとち、桶として用ゆ、又太き木をくりぬきたるも見ゆ、邊土は人民にいとま多きゆへ、丁寧なる細工をしても用は足りぬにや、

〔新撰字鏡〕竹筍同息元則元二反、

〔段注說文解字五上〕筍竹胎也、臨人注曰、筍竹萌、按許與鄭稍異、胎言其含苞、萌言其已溜也、吳都賦曰、苞筍抽節引伸爲竹、青皮之稱、尙書云、敷重筍、席禮器如竹、筍之有

其音爲賀切、今字作筍、从竹旬聲、思允切、十二

〔干祿字書上聲〕筍筍上通下正

〔本草和名十三〕竹筍崔禹云、筍一名草華、出養生和名多加牟奈、

〔倭名類聚抄二十〕筍爾雅注云、筍音華、字亦作筍、竹初生也、本草云、竹筍味甘平無毒、燒而服之、

長間筍 兼名苑注云、長間筍今案和名 筍青最晚生、味大苦也、

〔撮壤集竹〕筍同類字 龍孫レリソソ 同

〔書言字考節用集六〕筍同類字 筍同類字 初篁 竹萌爾雅 竹胎說文 竹子本草 竹芽

〔藻鹽草八〕筍

から玉筍の異名也、たけの子ともよめる也、今さらし何おひつらむたけのこの たけのふるねのおひかはる拾遺、是たかん をくれてさせるねたかな、かきねにおふるたけのこ 雪の